

日 時 平成25年10月3日(木) 13:10～13:55

場 所 附属小第1音楽室

指導者 今村 志保

本授業の主張点

本授業では、日本の民謡音階を使って節づくりを行います。試行錯誤しながら言葉の抑揚に合うように音を組合せます。日本の民謡音階の音を組合せると日本の旋律の感じが生まれるという、音階の面白さを感じ取って音楽づくりをする児童の姿をめざします。

1 題材名 民謡の世界をのぞいてみんよう ～音階が変われば音楽も変わる～

【音階】

2 題材の目標

- 歌唱活動や音楽づくりを通して、長音階と日本の民謡音階の違いを感じ取り、日本の民謡に親しむようにする。
- 日本の民謡音階によって生まれる日本の旋律の特徴を感じ取って歌ったり音楽づくりをしたりする。

3 評価規準【学力デザイン レベル2より】

評価の観点	ア 音楽への 関心・意欲・態度	イ 音楽表現の 創意工夫	ウ 音楽表現の技能
評価規準	長音階や日本の音階でつくられた音楽に関心を持ち、進んで歌ったり節づくりをしたりしている。	①言葉の抑揚や拍に合うようにリズムを工夫し、リズムの節をつくっている。 ②日本の民謡音階を使い、言葉の抑揚に合う音の組合せを工夫し、節づくりをしている。	日本の民謡音階の生み出す日本の旋律の特徴を感じ取り、歌ったり節づくりをしたりしている。

4 題材設定の理由

(1) 児童の実態

本学級は、音楽が好きな児童が多く、歌唱表現や器楽表現に意欲的に取り組んでいる。日本の音楽については、これまでにわらべ歌を取り扱ったことがある。また、遊びの中で歌われているわらべ歌や運動会で毎年使われるソーラン節は、児童にとって身近な楽曲である。しかし、このような楽曲が、昔から歌い継がれてきたことや日本の音階で音楽が構成されていることを意識している児童は少ない。日本の音楽と聴き慣れた長音階を使ってつくられた楽曲との違いを感じ取る学習経験もあまりない。また、佐賀の民謡については触れる機会は少なく、あまり馴染みがない。

音楽づくりについては、4小節の短いフレーズづくりに取り組んだことがある。指定された音を自由に組合せてフレーズをつくったため、音と音のつながりやフレーズの流れを考えてつくる児童は少なかった。

(2) 題材の意義

本題材は、日本の民謡音階の音を組合せることで日本の音楽の雰囲気が生まれるという面白さに気付かせることをねらいとしている。本題材で取り扱う日本の民謡音階は小泉文夫の音階論(『日本の音—世界のなかの日本音楽』)による日本の民謡音階である。この、日本の民謡音階と長音階の中でも児童に馴染みのあるハ長調の音階を扱うことで、日本の音楽と西洋の音楽の音階の構成や楽曲の雰囲気の違いに気付くことができると考える。このことは、本校、学力デザインにおける【調性】のレベル2「音楽には音階を形成する一定の音組織があることを知る」にあたる。また、学習指導要領では、音楽づくりの指導において我が国の音楽に使われている音階を児童の実態に応じて取り

扱うことになっている。日本の民謡の特徴をつかむためにも、日本の民謡の雰囲気を生み出している日本の民謡音階について取り扱うことは意義あることと考える。

(3) 指導上の着眼点（視点の具体化の側面から）

本研究の視点「構造に基づいた見通しをもてるように、『音楽の型』を生かした音楽づくりを設定する」において、以下の点を捉えてほしい。

- ・ 5音で日本の民謡音階が成り立っているということ
- ・ 日本の民謡音階の音を組合せることで日本の旋律の感じになること

指導にあたっては、長音階と日本の民謡音階を比較させながら、構成する音や楽曲の雰囲気の違いを気付かせていく。そのために、複数の楽曲を提示し長音階でつくられた楽曲と日本の音階でつくられた楽曲を歌い比べながら、日本の音楽の雰囲気を感じ取らせる。

楽曲を特徴付ける要素に音階があることを気付かせた上で、音楽づくりに取り組む。つくる段階では、日本の民謡音階を使うことと言葉の抑揚に合うように音を組合せることを音楽づくりのきまりとして提示する。音と音のつながりや節のまとまりを意識してつくることができるように、言葉の抑揚と音高を関連付けた音楽づくりを設定する。個人での音楽づくりを仕組み、繰り返し鍵盤ハーモニカで演奏して確かめながら取り組むことができるようにする。個人での活動後、いろいろな節を聴くことができるように、グループで聴き合う活動を仕組む。日本の民謡音階を使っても、音の組合せ方によっては日本の節らしく聴こえない場合もある。グループで聴き合うことで、つくった節の感じや音の組合せ方を複数の節で比べ、その原因を探ることができると思う。また、鍵盤ハーモニカの演奏技能の個人差が大きいので、自分で演奏することが難しい場合には友達に演奏してもらい、つくった節の感じを確かめることができることから、グループでの活動は有効である。日本の民謡音階を使って演奏することに慣れていないので、拡大鍵盤に使う音に印を付けて提示したり、児童の鍵盤ハーモニカで使う音の鍵盤にシールを貼ったりして、取り組めるようにする。全体で聴き合う場面では、日本の民謡音階を使っているということを音だけで判断することが難しいと感じる児童もいるので、楽譜を一緒に提示し、音と楽譜を関連させて聴くことができるようにする。

題材終末では、日本の民謡の特徴を十分に感じ取った上で更に日本の民謡に親しむために、佐賀の民謡の歌唱活動を設定する。その際、ゲストティーチャーを招き、演奏や歌唱指導をしてもらう。生の民謡の演奏を聴くことで、佐賀の民謡への関心を高めたい。

5 教材について

日本の民謡音階



教材曲A	歌のにじ	佐田和夫 作詞	岡部栄彦 作曲
教材曲B	とんび	葛原しげる作詞	梁田 貞 作曲 石桁冬樹編曲
教材曲C	まきばの朝	文部科学省	船橋栄吉 作曲
教材曲D	ひらいた ひらいた	わらべ歌	
教材曲E	うさぎ	日本古謡	
教材曲F	さくら さくら	日本古謡	
教材曲G	岳の新太郎さん	多良地方民謡	
教材曲H	佐賀筆筒長持唄	佐賀県民謡	

音階については、完全4度の枠をなす2つの核音から短3度上に中間音1つという形の枠組みの日本の民謡音階を取り扱う。（小泉文夫『日本の音—世界のなかの日本音楽』）。

教材曲A～Cは、ハ長調の歌唱曲である。既習曲でもあり児童にとって身近な、歌いやすい楽曲である。臨時記号がないので、音だけでなく楽譜からも教材曲D～Fとの違いを比較するのに適した教材曲である。

教材曲Dはわらべ歌、教材曲E、Fは日本古謡である。教材曲A～Cとは使われている音が異なり、日本の音楽の雰囲気を感じ取ることができる楽曲である。いずれも既習曲で児童にとって耳慣れた楽曲である。

教材曲G、教材曲Hは佐賀の民謡である。教材曲Gは、佐賀県版の音楽ノートにも紹介されている。

6 指導計画（全4時間）（ は視点）

次	時	教材	主な学習活動	指導上の留意点	評価
1	1	ABC DEF ↓	日本の民謡音階について知ろう - 教材曲A～Fを歌い日本の旋律とそれ以外の旋律に分類する。 - 長音階と日本の民謡音階を鍵盤ハーモニカで演奏し違いについて話し合う。	- 楽曲の雰囲気の違いから分類させ、感じたことを板書で整理する。 - 楽曲の雰囲気の違いが構成される音によって違うことに気付かせるために、楽譜を提示する。 - 拡大鍵盤でそれぞれの音階で使う音に印を付け、音階の仕組みを可視化する。	ア ウ
2	2		リズムの節をつくろう - 歌詞をつくり、歌詞（言葉）に合うリズムを考える。 - 歌詞（言葉）の抑揚を楽譜に図で描く。 - つくったリズムの節をリズム打ちする。	- 歌詞づくりのヒントになるように、言葉を掲示しておく。 - 言葉のリズムづくりを例示し、いくつかのリズムパターンを掲示する。 - 次時の節づくりで音の組合せをできるように、言葉の抑揚を記入するための楽譜を準備する。 - 歌詞に抑揚をつけて言いながらリズム打ちをするよう促す。	イ ①
	3 (本時)		日本の民謡音階を使って節づくりをしよう - 日本の民謡音階を鍵盤ハーモニカで演奏する。 - 日本の民謡音階を使って、節づくりをする。 - グループで聴き合う。 - 全体で聴き合い、感じたことについて話し合う。	- 音楽づくりの見通しをもつために、日本の民謡音階を構成している音に印を付けた拡大鍵盤を提示する。 - 音楽づくりの見通しが立つように、日本の民謡音階を使うことと、言葉の抑揚に合わせてつくるという音楽づくりのきまりを提示する。 - つくった節を聴き比べることができるように、グループで聴き合う活動を設定する。 - つくった節の感じや使っている音を比べられるように、演奏を聴くときに楽譜の画像を提示する。	イ ②
3	4	GH ↓	佐賀の民謡を歌ってみよう - 教材曲G、教材曲Hを聴取する。 - 教材曲Gを歌う。 - 教材曲Gを歌って感じたことについて話し合う。	- G Tに教材曲G、Hを歌ってもらう。 - 楽譜を提示し、言葉の意味や楽曲の背景などを説明する。 - 児童が旋律を覚えることができるように、G Tにフレーズごとに範唱をしてもらう。 - 長音階でつくられた楽曲の雰囲気の違いや歌った感じの違いについて問う。	ウ

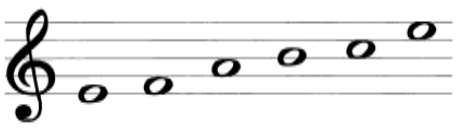
7 本時の指導（本時 3 / 4）

（1）目標

日本の民謡音階の特徴を感じ取り、言葉の抑揚に合うように日本の民謡音階の音の組合せを考えて、鍵盤ハーモニカで試して弾きながら、節づくりをすることができる。[音楽表現の創意工夫]

（2）展開

ゴシック・・・視点に関わる「音楽の型」

学習活動	教師の働きかけ（○）と形成的評価（◆）
1 日本の民謡音階を鍵盤ハーモニカで弾き、日本の民謡音階の特徴をつかむ。 2 学習のめあてを知る。	○日本の民謡音階の仕組みを確認するために、日本の民謡音階で使われている音に印を付けた拡大鍵盤を提示する。 ○音階の特徴の違いを比較できるように、長音階と日本の民謡音階をオルガンで弾く。
民謡音階を使って節づくりをしよう	
3 節づくりの方法を知り、4小節の節をつくる。 ＜音楽づくりのきまり＞ ・日本の民謡音階の音を使う。 ・言葉のよくように合うように音を選ぶ。 ＜提示する日本の民謡音階＞  【予想される児童の反応】 ・音階の音を使うと日本っぽく聴こえるね。 ・同じ音ばかりでなくいろいろな音を使うといいよ。 ・あまり日本の音楽っぽく聴こえないね。どうしてかな。	○節づくりを個人で行うための音楽づくりのきまりを示す。 ○言葉の抑揚と音の組合せを考えるヒントとなるように、音の組合せ方の例を示す。 ○五線譜への記譜が難しいと感じる児童もいるので、階名で記録するワークシートを準備しておく。 ○楽譜をつくることだけで終わっている児童やどの音を使うか迷っている児童には、鍵盤ハーモニカで試し弾きをしながらつくるように促す。 ○言葉の抑揚と音高の関係をつかませるために、言葉に合わせて一緒にハンドサインをする。 ◆日本の民謡音階の音の組合せを考えて、節づくりをしているか。（ワークシート、観察） A 言葉の抑揚を考えて日本の民謡音階の音の組合せを工夫し、節づくりをしている。 B 日本の民謡音階の音を使い、節づくりをしている。 →言葉の抑揚に合うように音の組合せを変えるよう促す。 C 日本の民謡音階を使わずに節づくりをしている。 →日本の民謡音階の音を確認し、一緒に音の組合せを考える。 ○鍵盤ハーモニカの演奏や記譜が難しいと感じている児童には、演奏している音を代わりに記録したり、記録されたフレーズを代わりに演奏したりして、一緒にフレーズをつくっていく。同じように、グループの友達に記録や演奏を頼んでよいことを伝える。 ○友達の演奏を聴いたりアドバイスを聞いたりして変更できるように、再考する時間を確保する。 ○日本の旋律の感じに聴こえない節があった場合には、他の節の楽譜を見て使っている音について比較するよう促す。 ○日本の民謡音階を使っていることを確かめながら聴くことができるように、楽譜を画像で提示する。 ○自分で演奏することが難しい児童がいる場合には、変わりに演奏する。 ○音を組合せる時に気を付けたことを問いかけ、音階や日本の旋律の感じなどに関わる発言を板書で整理する。 ○本時の学習で分かったことや面白かったことをワークシートに記述するよう促す。
4 つくった節をグループで聴き合う。	
5 つくった節を演奏し、聴き合って感じたことを話し合う。	
6 本時の学習を振り返る。	